

土木學會第1回年次學術講演會講演

(应用力学之部 No. 9)

地下水不定流の新計算法

(New Method for the Calculation of Unsteady Flow of Groundwater.)

會員本間仁*

1. 基本方程式 地下水の運動に關しては Darcy の法則が成立する事が一般に認められてゐるが、この法則は水の運動に對する摩擦抵抗が流速に比例する事を意味するものであつて、地下水の速度が一般に甚だ遅く勿論限界速度以下にある事よりすれば、この法則には充分な理論的根據があると言つてよい。先づ以下に用ふる記號の主なるものを擧げれば

v : 地下水の流速, k : 滲透係数, Q : 或る断面を通過する流量, z : 任意の点の基準面よりの高さ,

p : この点に於ける水圧, w_0 : 水の単位体積の重さ, ρ : 水の比重, μ : 水の粘性係数

v は水分子の実際の速度ではなく、流れの平均方向に垂直に小面積 ΔA を取り之を通る流量を ΔQ とする時に

$$v = \Delta Q / \Delta A$$

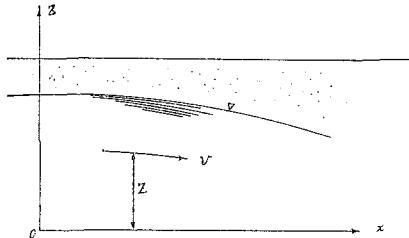
圖-1.

にて表はしたものであつて、之に關する Darcy の法則は

但し s は流れの方向に測る長さである。

又 k の値に關しては種々の研究があるが、此處にはこの問題には觸れず、 k は常に既知の常數であると考へる。

地下水流の様な緩速度の運動に対する Navier-Stokes の一般運動方程式は



速度ポテンシャルを ϕ とし、(2) 式の第 1 式に $\partial x/\partial s$ 、第 2 式に $\partial y/\partial s$ 、第 3 式に $\partial z/\partial s$ を乗じて之等を加れば

$$\rho \frac{\partial^2 \varphi}{\partial s \partial t} = \rho g \frac{\partial}{\partial s} \left(z + \frac{p}{\rho g} \right) + \mu \frac{\partial}{\partial s} (\nabla^2 \varphi)$$

従つて定流状態に於ては

然るに一方に於て定流に對しては Darcy の法則が成立せねばならないのであつて、之は (1) 式より

* 内務技師 工学士 内務省下關土木出張所勤務（昭和 12 年 4 月 10 日講演）

(3) と (4) とが同一の式であらねばならない。その爲には次の條件が成立すればよい。

$$\mu \nabla^2 u = -\frac{\rho g}{k} u, \quad \mu \nabla^2 v = -\frac{\rho g}{k} v, \quad \mu \nabla^2 w = -\frac{\rho g}{k} w$$

之等を(2)式に代入すれば地下水の基本運動方程式として次式を得る。

之を軸対称の円環座標に書き直せば

但し v_r は r 方向の流速である。尚運動の平均方向たる s の方向の速度を v_s とすれば(5)式より

連続方程式の一般の形は

z 軸のまはりの軸対称の場合に對しては

以上を以て地下水水流に對して理論的な取扱ひを行ふに必要な基本方程式を導入する事が出來た。

2. 井の問題 図-2 の様な不滲透層に達

する井を考へ、井の周壁は多孔質で水の滲透が全く自由なるものとする。井より一定流量 Q を絶えず汲み上げる時に、地下水水面は図に示す様な状態を保ち、地下水水流は井の中心へ向ふ定流状態にあるものと假定すれば、運動方程式は(7)式より

$$\frac{1}{\rho g} \frac{dp}{ds} + \frac{v_s}{k} + \frac{dz}{ds} = 0$$

地下水面上では $p=0$ であるから

井の問題に於ては連続方程式は次の形にて與へる事が出来る。

h は不滲透層より地下水水面までの高さであるから r の函数である。尙之に $v_r = v_z \cot \alpha$ を代入すれば

従来井の問題に於て一般に用ひられた方法は $d\varphi/ds = dh/dr$ と假定して (11) 式の代りに

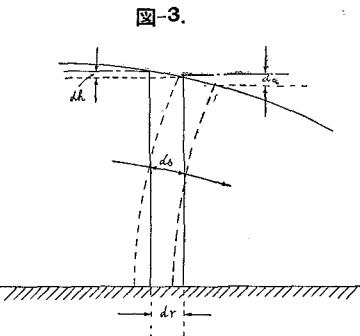
$$Q = -2\pi rhk \frac{dh}{dr}$$

を用ふるのであるが、この假定は図-3に示す様に水面勾配が大きくなると誤差が大きい。

之に対する著者の解法は (12) 式を r にて微分し

$$\frac{Q}{2\pi r^2} = [v_z \cot \alpha]_z = n \frac{dh}{dr} + \int_0^h \frac{\partial v_r}{\partial r} dz$$

右邊の第 1 項は水面の値を表はすものであるから 水面の條件 (10) 式を代入すれば



$$v_z = -\frac{v_s^2}{k} = -k \left(\frac{dh}{ds} \right)^2$$

且つ $\frac{dh}{dr} = \tan \alpha_0$ であるから

$$\frac{Q}{2\pi r^2} = -k \left(\frac{dh}{ds} \right)^2 + \int_0^h \frac{\partial v_r}{\partial r} dz$$

右邊の第 2 項は直接計算し得ないが、此處で v_r が一つの鉛直線上で一様と假定すれば

$$v_r \doteq -\frac{Q}{2\pi rh}$$

之を上の式に代入し、井内の水位を h_0 、井の半径を r_0 として計算すれば結局次の式となる¹⁾。

$$h^2 - h_0^2 = \frac{Q}{\pi k} \ln \frac{r}{r_0} + \frac{1}{H^2} \left(\frac{Q}{2\pi k} \right)^3 \left(\frac{1}{r_0^5} - \frac{1}{r^2} \right) + \frac{1}{2H^4} \left(\frac{Q}{2\pi k} \right)^5 \left(\frac{1}{r_0^4} - \frac{1}{r^4} \right) \dots \dots \dots \quad (13)$$

然るにこの式に於ても一般の近似解法に於けると同じ矛盾が殘されてゐる。即ち $r \rightarrow \infty$ にて $h = H$ である事は明かなるにも拘らず、(13) 式では之が成立する爲には $Q = 0$ でなければならぬ。著者は之を以てかゝる状態の井の周囲の地下水は定流状態を呈する事は出來ない事を表はすものと考へる²⁾。即ちこの種の井の問題は厳密に言へば不定流として計算せねばならないのである。

3. 不定流としての井の問題 基本運動方程式は不滲透層が水平なる時は

$$\frac{1}{g} \frac{\partial v_s}{\partial t} + \frac{1}{\rho g} \frac{\partial p}{\partial s} + \frac{v_s}{k} \frac{\partial z}{\partial s} = 0$$

この場合の自由水面の條件は

連続方程式は井が不滲透層に達してゐる時に、滲透層の空隙率を α として

$$\lambda \frac{\partial h}{\partial t} + \int_0^h \left(\frac{v_r}{r} + \frac{\partial v_r}{\partial r} \right) dz + \frac{1}{dr} \int_h^{h+\frac{\partial h}{\partial r} dr} v_r dz = 0$$

之は近似的に次の様に書く事が出来る。

$$\lambda \frac{\partial h}{\partial t} + \frac{1}{r} \int_0^h v_r r dz + h \frac{\partial v_r}{\partial r} + v_r \frac{\partial h}{\partial r} = 0 \quad \dots \dots \dots \quad (15)$$

¹⁾ この途中の誘導は土木學會誌第 21 卷第 7 號 973 頁を參照せられたい。

²⁾ この點は上に述べた處だけでは説明不充分であるが此處には略す。

更に今一つの条件は

$$\left[-2\pi r \int_0^h v_r dz \right]_{r=r_0} = Q(t) \quad \therefore \quad \left[\lambda \frac{\partial h}{\partial t} + h \frac{\partial v_r}{\partial r} + v_r \frac{\partial h}{\partial r} \right]_{r=r_0} = \frac{Q(t)}{2\pi r_0^2} \quad \dots \dots \dots \quad (16)$$

以上の諸式が地下水不定流の基本式であるが、之等より直接に解答を求める事は甚だ困難であるから以下に著者の近似解法を述べる。

此の解法にて用ふる假定は dh/dr が餘り大きくないものとして

$$v_s \approx v_r = v(r, t)$$

と考へるのであつて、斯く假定すれば上述の基本式は次の様になる。

$$\frac{1}{g} \frac{\partial v}{\partial t} + \frac{1}{\rho g} \frac{\partial p}{\partial r} + \frac{v}{k} = 0 \quad \dots \dots \dots \quad (17)$$

$$\lambda \frac{\partial h}{\partial t} + \frac{h}{r} v + h \frac{\partial v}{\partial r} + v \frac{\partial h}{\partial r} = 0 \quad \dots \dots \dots \quad (18)$$

$$\text{自由水面にて} \quad \frac{1}{g} \frac{\partial v}{\partial t} + \frac{v}{k} + \frac{\partial h}{\partial r} = 0$$

$$r=r_0 \text{ にて} \quad \left[\lambda \frac{\partial h}{\partial t} + h \frac{\partial v}{\partial r} + v \frac{\partial h}{\partial r} \right]_{r=r_0} = \frac{Q(t)}{2\pi r_0}$$

不定流に對しては今一つの境界條件が必要であつて、之が各種の問題に応じて定まる。

一例として一定流量 Q を絶えず汲み出す時の水面の変化に就ては次の様に計算する。連続方程式は

$$\lambda \frac{\partial h}{\partial t} + \frac{h}{r} v + h \frac{\partial v}{\partial r} + v \frac{\partial h}{\partial r} = 0$$

之に rdr を乗じて r_0 より ∞ まで積分すれば

$$\lambda \int_{r_0}^{\infty} \frac{\partial h}{\partial t} dr + \int_{r_0}^{\infty} \frac{\partial(hrv)}{\partial r} dr = 0$$

既に述べた様に水平層上の井の問題に於ては地下水面の高さ h は $r \rightarrow \infty$ にて $h = \infty$ であるから、途中にて静水面 $h = H$ と交る事となる。こ

の交點を $r=R$ とすれば既に述べたる關係は $r < R$ に於てのみ成立するのであつて $r > R$ に對しては別に解かねばならない。故に連続方程式は

$$\lambda \int_{r_0}^{R(t)} \frac{\partial h}{\partial t} dr + \int_{r_0}^{R(t)} \frac{\partial(hrv)}{\partial r} dr = 0 \quad \dots \dots \dots \quad (19)$$

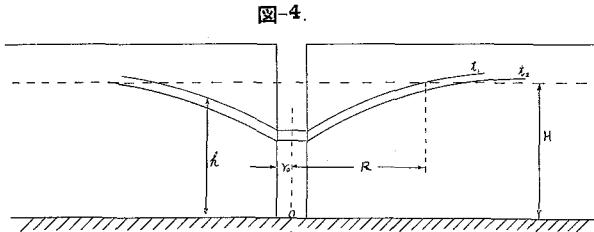
$$\text{運動方程式は} \quad \frac{1}{g} \frac{\partial v}{\partial t} + \frac{v}{k} = -\frac{\partial h}{\partial r} \quad \text{但し} \quad r < R$$

連続方程式 (19) を書き直せば $r=r_0$ にて $Q = -2\pi r_0 h_0 v_0$ であるから

$$\lambda \int_{r_0}^{R(t)} \frac{\partial h}{\partial t} dr + [h rv]_{r=R} R(t) + \frac{Q}{2\pi} = 0 \quad \dots \dots \dots \quad (20)$$

この第 1 項は $\frac{\partial h}{\partial t}$ がほゞ一様と假定すれば $\left[\lambda \frac{r^2 dh_0}{dt} \right]_{r_0}^{R(t)}$ となるが、第 2 項は $r > R$ の部分の値より定めねばならない。 $r > R$ に對する基本式は $v_r = 0$ であるが、その代りに $v \frac{\partial v}{\partial r}$ を考慮に入れれば

$$\frac{1}{g} \left(\frac{\partial v}{\partial t} + v \frac{\partial v}{\partial r} \right) + \frac{v}{k} = 0 \quad \text{及び} \quad \frac{v}{r} + \frac{\partial v}{\partial r} = 0$$



この兩式を解けば

$$2 - Ce^{\frac{g}{k}t} + r \frac{dC}{dr} e^{\frac{g}{k}t} = 0$$

之が t の如何に拘らず成立せねばならないのであるが、それは不可能であるから $r > R$ にては運動方程式と連続方程式が両立しない。故に R が擴がり地下水面上に勾配を生じて始めて流れを生ずるのであつて、(20) 式中の $[h_r]_{r=R}$ は零と見做すべきである。

$$\therefore \lambda \int_{r_0}^{R(t)} r \frac{\partial h}{\partial t} dr + \frac{Q}{2\pi} = 0$$

この両邊を t にて微分すれば

之は dR/dt を與へる式であるが實際には $\partial h/\partial t$ 及 $\partial^2 h/\partial t^2$ を求める事が困難であるから時間的変化が小さい時は水面形を近似的に

$$\frac{Q}{\pi k} \ln \left(\frac{R}{r_0} \right) = H^2 - h_0^2 \quad \therefore \quad R = r_0 \exp \left\{ \frac{\pi k}{Q} (H^2 - h_0^2) \right\}$$

を以て表はし之を次の近似式に代入する。

$$\frac{dh_0}{dt} = \frac{Q}{\lambda \pi r_0^2} \cdot \frac{1}{1 - \exp \left\{ 2 \frac{\pi k}{Q} (H^2 - h_0^2) \right\}} \quad \dots \dots \dots \quad (22)$$

(22) 式は井の水面の低下する速度を表す式であつて更に之を解けば

$$h_0 + \frac{Q}{4\pi kh_0} \exp \left\{ 2\frac{\pi k}{Q} (H^2 - h_0^2) \right\} = \frac{Q}{\lambda \pi r_0^2} t + C$$

最初の条件を $t=0$ にて $h_0=H$ とすれば

$$\frac{Q}{4\pi k} \left[\frac{1}{h_0} \exp \left\{ 2\frac{\pi k}{Q} (H^2 - h_0^2) - \frac{1}{H} \right\} - (H - h_0) \right] = \frac{Q}{\lambda \pi r_0^2} t \quad \dots \dots \dots \quad (23)$$

之を更に $R(t) = r_0 \exp\left(\frac{\pi k}{Q}(H^2 - h_0^2)\right)$ に代入すれば各瞬間に於ける R の値を求める事が出来る。